

中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程の研究

—ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2022年度)—

ベグマトフ・アリシエル ニューヨーク大学客員研究員

宇佐美智之 京都芸術大学専任講師

ラフマノフ・ハウスニディン サマルカンド考古学研究所研究員

デクルイネール・デルフィーヌ パリ国立自然史博物館博士後期課程

ミルザアフメドフ・シロジ サマルカンド考古学研究所研究員

The Formation and Development of Cities in the Oases of Central Asia: Excavations at Mingtepa in Uzbekistan (2022)

BEGMATOV, Alisher Visiting Research Scholar, New York University

USAMI, Tomoyuki Junior Associate Professor, Kyoto University of the Arts

RAKHMONOV, Husnidin Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

DECROYENAERE, Delphine PhD Candidate, National Museum of Natural History of Paris

MIRZAAHMEDOV, Siroj Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

1. はじめに

本プロジェクトは、中央アジア・オアシス地帯における都市の成立・展開過程について、考古学・地理学のアプローチから明らかにしようとするものである。この試みの一つとして、2021年より、ウズベキスタンのサマルカンド近郊に位置するミングテパ遺跡を調査している。この遺跡は、アラビア語や漢文史料に記録されるカブダンないし曹国に比定されるものである。

ミングテパ遺跡(39° 47' 32N 67° 10' 11E)は、サマルカンド市(アフラシアブ遺跡)から北東に約20 km離れた、ジョンボイ(Jomboy)地区・コラモイン(Qoramōyin)村に所在する(図1)。ここから北にはゴブディン

(Göbdin)山脈があり、北側にはザラフシャン川の支流であるブルングル川が流れている。周辺一帯の中でも比較的水が豊富な地域である。なお、この辺りにはサマルカンドオアシスの城壁と推定されるカンピルデュヴァルが確認されている。

遺跡の広さは約35 haであり、北側には特徴的な二重の城壁が設置されている。残存する城壁の長さとして、外側は約200 m、内側は300 mを超える。遺跡南側に位置するシタデル(中枢機能をもつ地区)は周辺の平坦地から約12 mの不定形の高まりである(図2)。そこは、北・東・西の3方位をシャフリスタンに囲まれ、南側に城壁をもつ構造をとっている。遺跡を南北2つに隔てる道路が東西方向に通っている。城壁の外

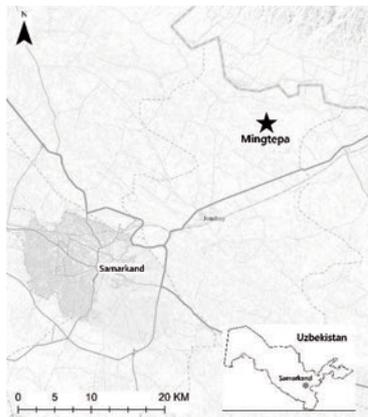


図1 Mingtepa 位置図

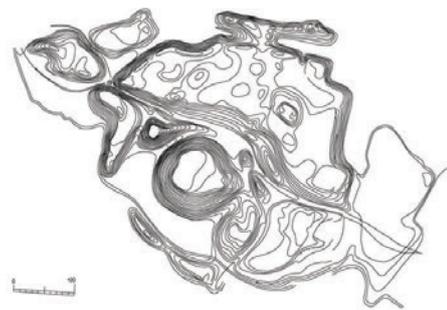


図2 ミングテパ遺跡全体図



図3 西通路の南壁の断面



図4 西通路の西壁の断面



図5 東通路の南壁の断面

側範囲(特に東西)にはラバードと推定される地区が広がる(ベグマトフ他 2022)。

2. トレンチ3の発掘調査結果

2021年度の調査では、シャフリスタン(住宅街)地区のトレンチ3(Tr N3)を3.1、3.2、3.3、3.4の4つの区画に分けて発掘し、遺構の床面まで確認できた他、通路や部屋などの規模や配置などが明らかになった。トレンチの東側(3.3と3.4に分立された区画に当たる部分)には幅約2.5m、長さ約9mと推定されるアーチ型通路があることが判明した。トレンチの西側(3.1と3.2区画に当たる部分)にもアーチ型通路が確認されたが、この通路は2つの部屋に分けられていた。なお、両通路とも奥側(南側)、つまり3.1と3.4の区画の壁と出入り口は確認されていなかった。

2022年度におけるミングテパ遺跡の発掘調査は、前年度と同様にトレンチ3を中心に実施した。最初に、昨年トレンチ保存用に埋めた土を取り上げる作業をし、3.1の区画を南と西に拡大し掘り下げ、西に拡大した部分は3.5と符合した。3.1区画を床面まで掘り下げた結果、西の3.5区画へ出入り口があったことが判明した(図3・4)。また3.5区画もさらに西へ導く通路があることが今回の発掘調査で明らかになっている。この通路については来年以降さらに調査を進める予定である。

3.1の区画は一つの小型の部屋となっており、その幅2m、長さ3.1mである。床は中硬度の粘土でできている。床からは、厚さ7~8cmの白灰色の杖の(折られた)塊や、炭化木の残骸、その他の有機物が検出された。部屋の天井高は3.1mであり、一部は良い状態に残存する。部屋への出入り口は、上述の3.5



図6 東通路の西壁の断面(2021年度に確認)

区画以外に北側3.2の方にもあり、これは外側の道路に出入り可能なように用いられたと推定される。部屋の南には保存状態の良い煉瓦積みの壁が検出された。煉瓦は47×23×9、47×25×9である。またこの壁の上部周辺に幅20cm、長さ30cmの穴がいくつか確認され、照明と部屋の換気などに用いられた可能性も考えられるであろう(図3)。部屋の西側は、高さ約1mの出入り口があり、煉瓦(47×23×9cm)で水平に積まれ、封鎖されている。この出入りの上部は横斜めに煉瓦(52×26×10cm)が配置され、そのさらに上部は煉瓦(50×25×9cm)が縦斜めに配置されている(図4)。

今回の調査では3.4区画の南部の壁も検出された。3.1の南壁と同じように水平に煉瓦が配されている。下部半分の保存状態は良くない(図5)。西壁は昨年既に検出され、良い保存状態であることが確認された(図6)。3.4区画の東には、予想していた通り出入り口が検出された。従って、約3m東にトレンチの区画を拡大し、発掘を進めた。この部分は3.6区画と符合した。ここにもアーチ型通路が確認された(図7)。今後、この通路を手掛かりに発掘調査計画を立てる予定である。なお、いうまでもなく今後の検証が必要で

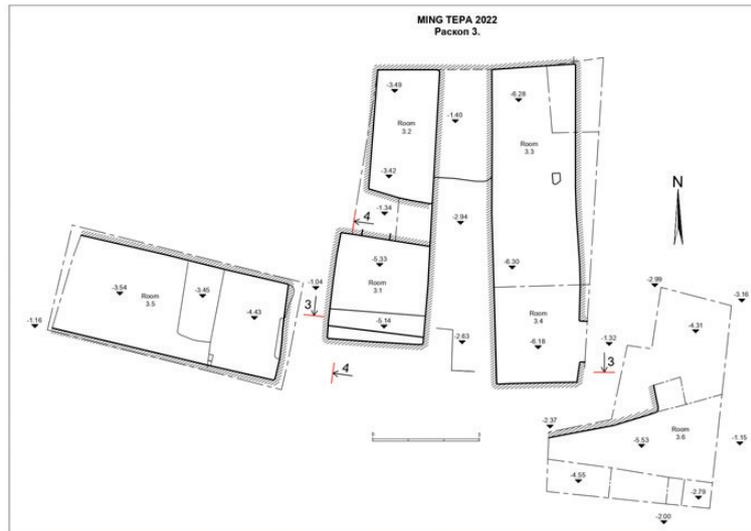


図7 トレンチ3全体図(3.5と3.6は新たに拡大した部分)



図8 出土遺物一部



図9 遺跡から収拾した貨幣(シシビル王)

あるが、これまでの成果から推測するに、この施設は「兵舎」のような場であったことを想定したい。

3. 出土遺物について

2022年度も多量の土器片や動物の骨などに加え、小像や貨幣など出土し、現在クリーニング・測量・撮影を進めているところである(図8・9)。これまで研究された骨の中では、ヤギ種(Caprine)は最も豊富な分類群であり、羊(Ovis aries)が最も多く、ヤギ(Capra

hircus)、牛(Bos taurus)がそれに続く。ブタ(Sus scrofa)とウマ科(Equus asinusとEquus caballus)は少数確認されている。また、狩猟された野生動物骨もみられる。主にガゼル(Gazella subgutturosa)種で、鹿のものである。

出土した遺物の中では土器片が最も多いが、その大半が6~8世紀頃のものであり、4~5世紀のものも稀に見られる。また、今回発掘された小像に山羊の頭部と棍棒を左手にもつ人物の下半身が確認された(図8)。

なお、出土貨幣は保存状態がよくないため同定が難しいが、遺跡周辺で作業員が採集した貨幣は7世紀前半のシシビル王のものであった。

4. 終わりに

2022年度の調査結果として、トレンチ3の遺構の構造がより具体的に把握できるようになり、議論が進んだといえる。すなわち、この遺構が兵舎のような施設の一部を担ったという見通しを得た。さらに、今回の調査を通して得られた各種の遺物も、ミングテパ遺跡の性格理解において重要なものである。総合的にみ

て、この遺跡が古代末期からイスラム期までの時期に重要都市の一つをなしたことが推定できようが、その実態解明に向けて今後のさらなる調査の進展が必要である。

■参考文献

- ・ベグマトフ・アリシエル、宇佐美智之、ラフマノフ・ハウスニディン、サンディボエフ・アリシエル、ボゴモロフ・ゲンナディー、ミルザアフメドフ・シロジ 2022「中央アジア・オアシス地帯における都市の成立と展開—ウズベキスタン共和国ミングテパ遺跡発掘調査(2021年度)—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』18-22頁 日本西アジア考古学会。